

## 座談会

## 日本語を学ぶ若者たちの想いをつなぐ

日本語を学ぶ若者たちの想いを受け、多くの国で「日本語スピーチ・コンテスト」が実施されている。1986年に国際交流活動としてスタートした「日本語スピーチ・コンテスト優秀者招聘事業」は、コンテスト優秀者を招き日本を体感してもらうことで、日本をさらに好きになってほしいという日外協の想いをかたちにしたものだ。30回目の節目にあたり、「日本語スピーチ発表会」の意義やこれまでの成果などを振り返っていただいた。

【出席者】（発言順、敬称略）

ジェニファー・サラ

山梨県庁 観光部国際交流課（2011年インドネシア代表）

佐藤秀明

NEC 人事部長代理

『月刊グローバル経営』編集委員会委員長

中野輝之

YKK ファスニングプロダクツ販売株式会社 マネージャー

前『月刊グローバル経営』編集委員会委員長

矢野冬生

日本在外企業協会 前 常務理事・事務局長

【司会】

馬越恵美子

桜美林大学 経済経営学系 教授

## 「国際的な草の根交流」の30年

馬越（司会）：最初に自己紹介をお願いします。

ジェニファー：2011年に参加したジェニファーで、ジャカルタ出身のインドネシア人です。インドネシアに行かれたことがある方は？

男性（全員）：はい。

ジェニファー：おお～！ たくさんいますね。嬉しいです。私は山梨県庁観光部国際交流課で働いています。1年半くらい甲府に住んでいますが、ジャカルタより暑くてびっくりしました。その上、冬が寒くて大変です。でも富士山を毎日見ることができて非常に嬉しいです。

馬越：2011年にお会いして以来ですが、日本語が一段と上手になりましたね。

ジェニファー：先生のおかげです。

馬越：そういうところも日本的な言い回しを学ばれたということで（一同・笑）、恐れ入りました。

佐藤：NEC人事の佐藤です。『月刊グローバル経営』編集委員会の委員をやる中で、日本語スピーチ・コンテスト優秀者発表会（以下スピコン）を知り、面白いなどは思っていました。私は02年から07年までマニラとシンガポールに駐在し、インドネシアを含めたアジア各国で仕事をしました。スピーチ要旨を読んで当時の現地の方々を思い出し「すごくよく分かるな」と感じていました